

# 五十年のあゆみ

徳島県立農林水産総合技術センター

森林林業研究所

# 五十年のあゆみ



平成十六年三月

徳島県立農林水産総合技術センター  
森林林業研究所

題 字

農林水産総合技術センター所長

多智花 俊裕

## ごあいさつ



徳島県知事  
飯 泉 嘉 門

このたび、徳島県立農林水産総合技術センター森林林業研究所は、昭和28年、林業指導所としての創立以来、幾多の変遷を経ながら、50周年の節目を迎えることとなりました。

この間、当研究所は、時代の変化や多様なニーズに対応しながら、健全な森林の造成や県産材需要拡大等、森林・林業、木材産業に関する数多くの研究成果をあげるとともに、林業技術・技能者の養成機関としても本県林業の振興に貢献することができました。

これもひとえに、長年にわたり研究に携わってこられた方々のたゆまぬ努力と、林業者をはじめとする多くの関係者の皆様方のご理解の賜であり、深く感謝申し上げます。

さて、森林は、木材資源としての経済的価値に加えて、近年は、地球温暖化防止に向けた二酸化炭素吸収源としてもその重要性が見直されております。

本県は、県土の75%を森林が占める森林県であり、今後、温暖化防止並びにその豊かな自然環境を活かした世界に誇れる「環境首都とくしま」の実現のため、更に現下の厳しい経済情勢を打破する「経済再生とくしま」の実現に向けて、一層の森林整備と川上から川下まで一体となった林業・木材産業の振興対策を強力に推進して参りたいと考えております。

最後になりましたが、この度の「五十年のあゆみ」の発刊が、今後の研究・研修に活かされ、創造性に満ちた技術開発につながり、ひいては本県森林・林業、木材産業の振興と県勢の発展につながることを心より祈念いたしまして、発刊に当たってのご挨拶といたします。

平成16年3月

## 50周年を迎えて



徳島県立農林水産  
総合技術センター  
森林林業研究所所長  
重田 輝 昭

徳島県立農林水産総合技術センター森林林業研究所の前身である林業指導所が、昭和28年秋に現在地に設置されて以来、今年で創立50周年を迎えることができました。

顧みますと、昭和40年には、和食県有林が総合試験林として当所へ移管されたのを機会として林業試験場に、また、昭和51年には、林業実習指導施設の整備に伴い、試験研究と技術・技能の研修という二つの機能を持つ林業総合技術センターと改称され、森林・林業、木材産業などの総合的な試験研究と、多くの林業技術者の養成に果敢に取り組んでまいりました。

近年、森林に対する県民の要請はますます高度化・多様化する中で、国においては、平成11年以降「食料・農業・農村基本法」、「森林・林業基本法」、「水産基本法」が相継いで制定されるなど、農林水産業を取り巻く情勢は急速に変化しております。

こうした情勢に伴いまして、平成13年には、県民生活に密着した新たな行政課題や、高度化・多様化するニーズに迅速かつ柔軟に対応するため、農林水産関係試験研究機関が統合され、「農林水産総合技術センター森林林業研究所」として、効率的かつ効果的な研究推進を目指し、新たな第一歩を踏み出したところであります。

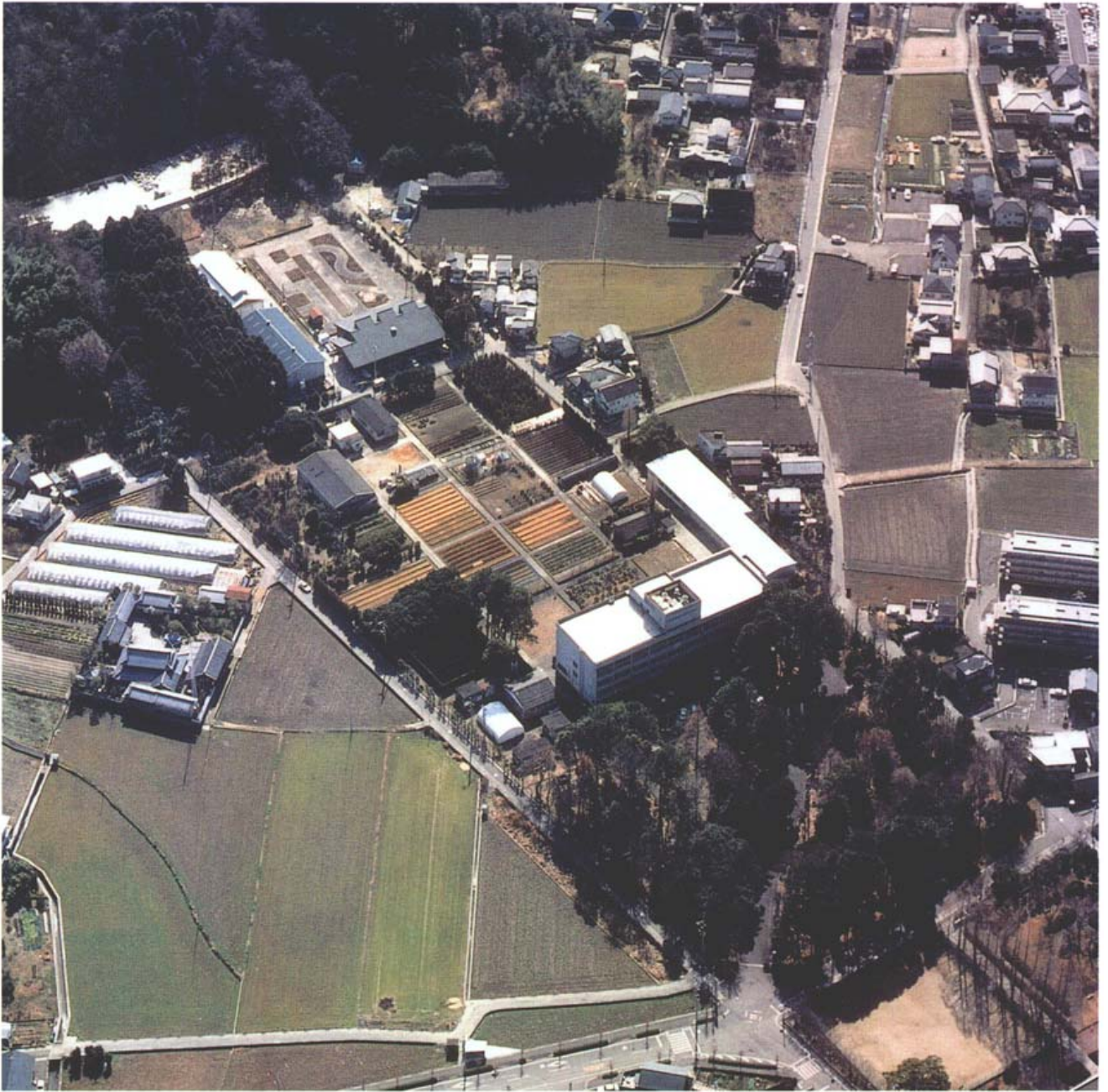
当研究所といたしましても、新たな研究課題・技術開発等を通して、これらの多様なニーズに応えるとともに、本県森林・林業、木材産業発展のために、職員一同全力で努力をしていく所存でございます。

このたび創立50周年を迎えるに当たり、これまでの試験研究等の経過とその成果を取りまとめ、「五十年のあゆみ」として刊行することといたしました。この記念誌が、これまでの50年を振り返るとともに、今後の本県森林・林業、木材産業の発展に寄与する礎となることを願ってやみません。

終わりにになりましたが、この50年間、御指導、御協力を賜りました方々に深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬ御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年 3月





森林林業研究所全景（平成15年1月撮影）



施設等



本館全景



木材需要開発センター全景



和食試験林全景



樹木園



苗畑・花木園



## 皇室ご視察

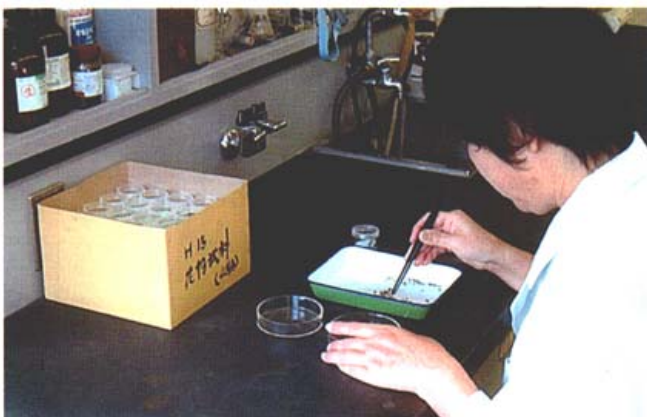


平成天皇・皇后両陛下のご視察（平成元年5月21日）



第40回全国植樹祭お手まき苗

## 試験研究



スギ雄花数の計測



防護資材の耐久性試験

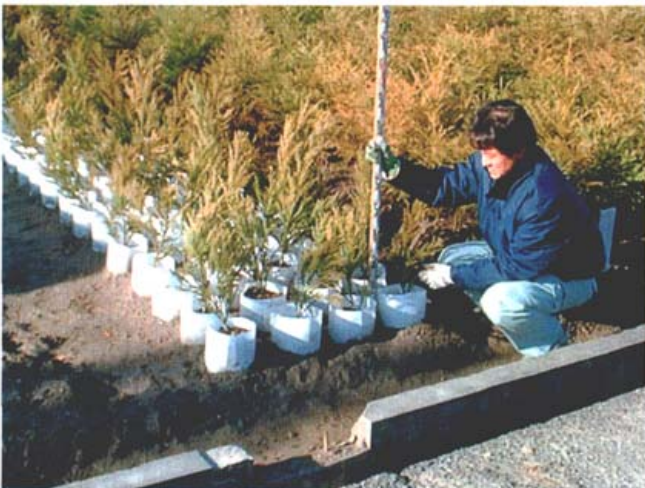




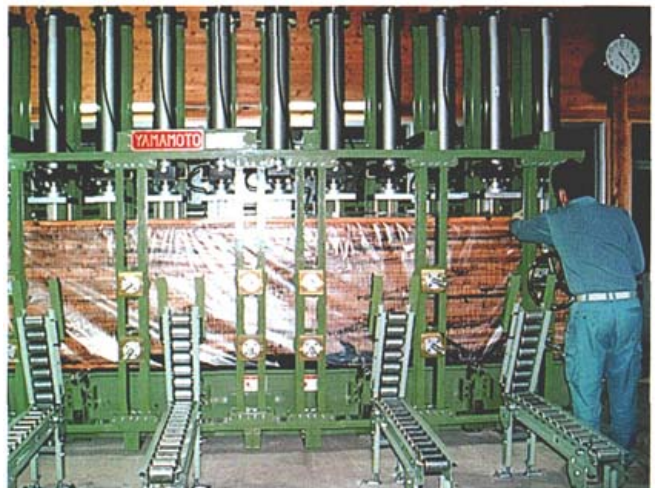
菌床シイタケ栽培試験



マツノザイセンチュウの接種



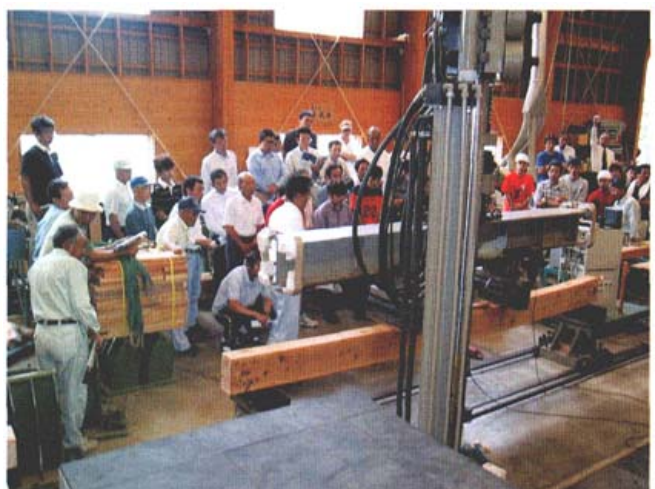
スギポット大苗試験



徳島すぎ集成材の試作



木製床遮音効果試験



木材需要開発センターの視察風景



## 林業技術研修



林業架線作業主任者講習



車両系建設機械運転技能講習



フォークリフト運転技能講習



林業就業前研修

## 行事等



森林林業研究発表会



知事巡視

# 第 I 章 沿 革



# 第I章 沿革

## 第1節 総説

### 1. 設立当時の背景

第二次大戦が悲惨な傷跡を残して終結したのは昭和20年8月であったが、その後の数年間は、食糧難や精神的な虚脱状態が人々を襲い、混乱が続いた時代である。




昭和25年頃から、朝鮮動乱を契機にして我が国の経済は、それまでの混乱ないし疲弊の状態から立ち直り、再建復興の道を歩み始めた。林業の分野においても、昭和25年に木材の統制が撤廃され、また朝鮮動乱ブームの影響を受けて木材価格は高い上昇を示すとともに、その好況はその後も続き、他の諸物価よりもはるかに高い水準を維持した。

一方、戦後の林業政策は、森林資源の充実と国土保全を目標として、昭和25年には林業普及指導事業の発足、造林臨時措置法の制定、さらに翌昭和26年には森林法が抜本的に改正され、森林計画制度が発足するとともに、森林組合が協同組合として位置づけられるなど、積極的に推進された。

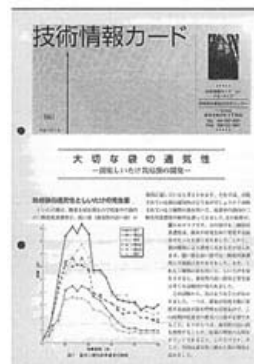
こうした木材価格の上昇や林業政策の積極的な展開によって、森林所有者の造林意欲は高まり、その後人工造林面積が急激な増加を示すとともに、林業生産所得は飛躍的に増大した。

このような社会経済情勢の変化に伴って、木材の価値が次第に重要視されるようになり、木材の高度利用や優良材の生産等に対する関心も大きくなってきた。この時期に全国でも有数の林業県であった本県にも、林業に関する技術の研究と指導の機能を併せ持つ指導研究機関を設置しようという気運が次第に高まってきた。

### 2. 年 譜

和 暦	森 林 林 業 研 究 所 の 動 き
昭和28.10.20	徳島県林業指導所設置規則公布
昭和29.11.15	徳島市南庄町（現在地）に庁舎が完成し、 総務課、林産課、林業課の3課が置かれる
昭和30.11	徳島県林業指導所報告第1号を発刊
	
	
	
昭和31.4.1	林産課が廃止され、総務係、試験研究係、指導係の3係制となる
昭和35.4.1	指導係が林業経営課に移管され、総務係、試験研究係の2係制となる
昭和36.7	協町の岩倉採穂台木園を当所へ移管
昭和38.7.1	庶務係、造林育種係、特林保護係の3係制となる

和 暦	森 林 林 業 研 究 所 の 動 き
昭和40. 4	鷲敷町の和食県有林を総合試験林として当所へ移管
昭和40. 6. 16	徳島県林業試験場と改称し、庶務係、造林経営科、育種特産科の1係2科制となる
昭和41	神山採種穂園を当所へ移管
昭和43. 4. 1	徳島県農業大学校林業分校が併設される
昭和47. 4. 1	庶務係、造林科、育種科、保護科の1係3科制となる
昭和49. 4. 1	樹芸科が新設され、1係4科制となる
昭和51. 4. 1	本館の改築に伴い、徳島県林業総合技術センターと改称され、専門技術員、研修係を新設し、2係4科制となる
昭和51. 7. 20	本館改築落成式
昭和55. 4. 1	木材科を新設し、2係5科制となる
昭和62. 4. 1	実大強度試験棟が開設される
平成 5. 4. 1	庶務係、育林科、保護科、木材利用科、木材化工科、特産科、企画研修係の2係5科制となる
平成 5. 10. 1	新技術開発試験棟の新設により、既設の実大強度試験棟を含め、国産材需要開発センター（オープンラボラトリー）を開設
平成 8. 6	前年度の業務を取りまとめた業務年報を発刊
平成10. 4. 1	特産科が緑化・特産科に改められる
平成11. 5	技術情報カードを発行
平成13. 4. 1	徳島県立農林水産総合技術センター森林林業研究所と改称され、総務担当、森林環境担当、森林生産担当、木材利用担当と担当制となり、企画研修及び木材需要開発センター業務には専門技術員が配置される
平成15. 4. 1	住宅性能資材試験棟を開設



## 第2節 組織の変遷と施設

### 1. 林業指導所の誕生

29万 ha の民有林を持ち、木工県としても知られる徳島県に、ぜひ林業の指導研究機関が欲しいという林業関係者の強い熱意は昭和28年になってついに実を結び、6月県議会において林業指導所の設置案が可決され、2か年計画で、製材と木材加工の研究と指導を主な目的とする指導研究機関が徳島市の旧徳島連隊射撃場跡に建設されることになった。

その後、昭和28年10月20日には規則第52号をもって「徳島県林業指導所設置規則」が公布され、秋田県林業試験場から高橋克巳氏など、木材利用の専門家を招き、同年11月1日付けで高橋氏は林業指導所長に任命された。翌年の昭和29年11月15日には敷地面積3.78haに、本館、製材工場、人工乾燥室、木材加工場等の庁舎をはじめ水中貯木場、苗畑、樹木園を含む施設が完成し、高松宮殿下をはじめ、各界の名士を迎え華々しく開所式が挙行され、ここに総務課、林産課、林業課の3課からなる徳島県林業指導所が誕生した。

開所当時の建物・施設・機構などは、次のとおりである。

#### ◇位置と面積

○徳島市南庄町5丁目69（現在地）

○敷地面積 3.78ha

#### ◇施設

○水中貯木場 495m<sup>2</sup>

○製材工場

- |                        |    |
|------------------------|----|
| ・48インチ自動送材車付帯鋸盤        | 1台 |
| ・42インチローラー送り装置付テーブル帯鋸盤 | 1台 |
| ・36インチ鉄台円鋸盤            | 1台 |
| ・自動帯鋸目立機               | 1台 |
| ・MC型電動横切円鋸盤            | 2台 |

○人工乾燥室

- |                   |    |
|-------------------|----|
| ・インターナル・ファン型30石入り | 2台 |
|-------------------|----|

○木材加工室

- |               |    |
|---------------|----|
| ・木工用帯鋸盤       | 1台 |
| ・18インチMC型横切鋸盤 | 1台 |
| ・24インチ自動鉋盤    | 1台 |
| ・44インチ自動鉋削盤   | 1台 |
| ・中型角ノミ盤       | 1台 |
| ・16インチ万能丸鋸盤   | 1台 |
| ・高速度面取盤       | 1台 |
| ・プレス装置        | 1式 |

○作業軌道 550m

○苗畑（試験苗畑） 0.30ha

○樹木園（600種植栽） 1.00ha（計画）

#### ◇建物

○庁舎 576m<sup>2</sup>



指導所建物



- 製材工場及び附属建物 455㎡
- 人工乾燥室及び附属建物 203㎡
- 製品倉庫 165㎡
- 木材加工室 366㎡
- その他 147㎡

◇職員

- 技術吏員6名（所長を含む）、事務吏員2名、補助職員8名、作業員23名、合計39名

◇建設費

- 40,569千円

昭和29年度において、まず製材、木材乾燥等の林産部門が活動を開始したが、当時県財政は極度にひっ迫していたため独立採算性を取らざるを得ず、本来の目的である研究、指導面を多少犠牲にしても林産事業を軌道に乗せることが急務であった。

ところが、昭和30年4月に原菊太郎氏が知事に就任すると、原木を購入し製品にして販売するという林産部門の運営形態に非常な疑問を持たれ、同年の6月県議会でその存廃問題が取り上げられる情勢となった。

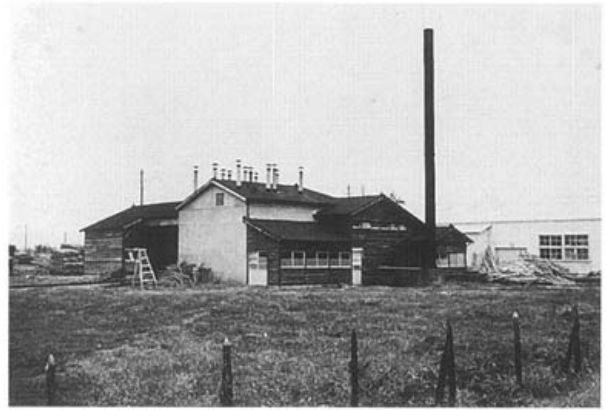
その後、暫定的に一時国有林材などの委託製材や加工を行ったが、結局、昭和31年3月31日付けで機構の改革が行われ、開所後わずか1年5か月にして林産部門はすべて廃止されることとなった。この機構改革によって、今まで林政課にあった普及係が当所に移管されるとともに、組織も総務係、試験研究係、指導係と改められ、以後は林業の試験研究と林業普及センターとしての二つの大きな役割をはたすことになった。

この時指導係に配置された職員は、専門技術員7名と徳島直轄地域の林業改良指導員11名で、本県の普及指導事業の中核となる陣容であった。

この機構改革により指導所の性格は一変したが、林産部門が廃止された関係上、林業部門でこれに代わる歳入を上げるべきである、という方針が決まり、試験研究係では直ちに県有林、県行造林用苗木や緑化用苗木、外国松苗木などの生産に着手したが、養苗施設が全くなかったため、苗畑造成から始めなければならなかった。しかも、かつての射撃場跡は粘土質の土壌で非常に排水が悪く、満身に苗木養成ができない状態であったため、昭和32、33年度の2か年にわたって荒地を開墾し、吉野川の砂質壤土と佐古山の赤色土を厚さ40cmに客土するとともに、排水路、灌水施設などを整備拡充した。

また、昭和33年度には、裏山の1.46haを試験林として購入し、さらに旧木材乾燥場を利用して種子貯蔵庫も建設された。これら排水路や灌水施設の整備、苗畑、樹木園の管理作業等はすべて失業対策事業として行われ、この体制は昭和38年度まで続いた。

昭和35年3月31日の県の機構改革に伴って、指導係は再び本庁の林業経営課に移管された。このため、指導所の組織は総務、試験研究の2係となり、人員は22名に減少したが、一方で歳入予算を満たすために養成した苗木生産本数は年々増大し、昭和35年度



木材乾燥室全景



苗畑の客土作業



スラッシュマツ（カリビアマツ）苗畑



スラッシュマツ（カリビアマツ）3年生

のピーク時には、苗木の売却本数が156万本に達した。

しかしながら、こうした苗木養成事業は自然現象に左右されやすいため、職員の精神的な負担と事務量は本来の試験研究業務を遙かに上回る相当なものとなり、このような業務状態は昭和37年度まで続いた。

一方試験研究に関しては、開所後間もなく林産部門から林業部門へ方向転換して以来、昭和37年までの間は、スラッシュマツの育苗、育種、適地適木調査などが調査研究の中心課題であった。

スラッシュマツは、昭和29年4月に、徳島県在住のオーストラリア人W・A・フィンニン氏を通じて輸入されたもので、初めは、もっぱら育苗と育林に関する一連の試験研究が進められてきたが、昭和35年頃から、幼齢時に風に弱いことと寒さに弱いことが指摘され、以後はこの樹種の適地の範囲を解明することと、いかにしてこの欠点を克服するかが研究の焦点となった。

そこで、昭和34年度には、徳島市諏訪山県行造林地（6.24ha）を試験地として3か年計画でスラッシュマツを造林し、実用開発試験に着手した。一方、昭和36,37年度には、新たに板野町で苗畑0.89haを購入し、もっぱらスラッシュマツの育苗に使用してきた。

そのほか、昭和36年7月には、脇町の岩倉採穂台木園（3.19ha）が県農務部から移管され、採穂台木園として育種事業の推進に大きな役割を果たした。

また、昭和37年3月、食用菌類研究室（63m<sup>2</sup>）が本館東側に完成し、その翌年には全国の公立林業試験研究機関でただ一つといわれる、プログラム式恒温室（33m<sup>2</sup>）が設置され、本格的なシイタケ関係の試験研究に着手した。

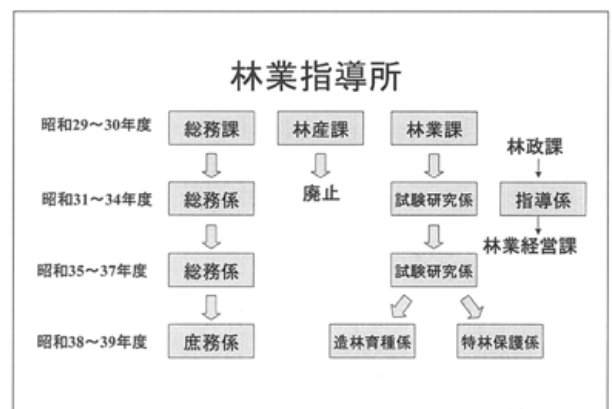
昭和38年7月1日、試験研究機関に対して、直ちに役立つ技術を求める声が高まってきたことに対し、現実に応じた試験研究を実施するため、試験研究係を造林育種係と保護特産係に分け、試験研究組織を強化した。



岩倉採穂台木園

## 2. 林業試験場と改称

昭和40年4月、鷺敷町の和食県有林が総合試験林として当所へ移管され、名実ともに林業試験場としてふさわしい態勢が整ったのを機会として、昭和40年6月16日付けで徳島県林業試験場と改称し、同時に庶務係、造林経営科、育種特産科の1係2科制となる機構改革が行われた。この時、育種、造林経営、土壌、森林保護、食用菌類の各研究室が設けられ、研究職員はすべて研究室に配置された。また、この時の総職員数



林業指導所組織図

は18名（内研究職11名）で、主な研究事項は次のとおりであった。

- ①林木育種試験 ②スラッシュマツ育成試験
- ③特産育成試験 ④育苗技術開発試験
- ⑤育林生産技術向上に関する試験
- ⑥林業病虫害防除試験

昭和41年度には、神山採種圃園（2.20ha）が県林業課から移管され、これにより林業試験場を中心として、岩倉採種圃木園、和食試験林、神山採種圃園を合わせて68.76haという広大な試験基盤が確立された。

昭和43年4月、林業後継者対策の一環として、徳島県農業大学校林業分校が併設され、実科生（修業年限1年）を対象に、林業に関する実践的な教育指導が開始された。

昭和47年4月、試験場の組織に検討が加えられ、庶務係、造林科、育種科、保護科の1係3科制となり、新たに次長が置かれ、次長が保護科長を兼務した。

さらに昭和49年4月、緑化樹の育成、木材加工、シイタケ栽培などの技術開発に対する要請の高まりに対応するため、樹芸科が新設され、1係4科制となった。

一方、昭和40年に経営管理が当試験場に移管された和食試験林については、総合試験林として効率的な運営を図るため、各種の実用化試験林を設定して現地試験を集中的に実施するとともに、研修所兼事務所（54m<sup>2</sup>）の建設、作業道の開設など施設の整備が昭和44年度から実施されたほか、ヤマモモやサクラ、野生ツツジ、緑化木などの見本林やスギ精英樹採種圃、クロマツ採種圃、スギ、ヒノキ等の次代検定林が相継いで設けられた。

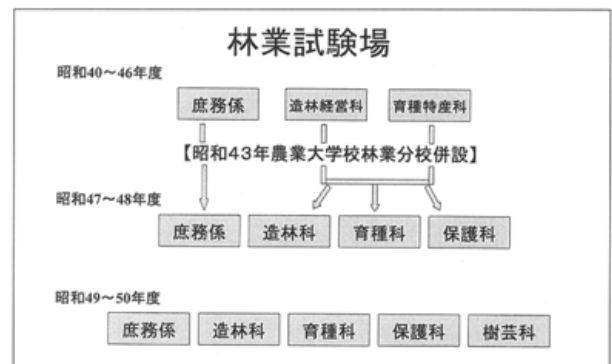
また、林業従事者及び後継者対策の一環として、高度の機械化技術等についての実践的技能と近代的な林業の経営管理能力を有する者を養成するため、昭和48年から2か年計画で国補事業を導入し、実習舎（277m<sup>2</sup>）、倉庫兼車庫（398m<sup>2</sup>）、運転コース（3,144m<sup>2</sup>）、研修用機械等の施設が整備された。

### 3. 林業総合技術センターの発足

林業試験場の本館は、年とともに老朽化が進み、昭和45年頃から本館の改築が要望されてきたが、昭和50年度に本館建設費479,427千円が認められ、鉄筋コンクリート4階建、延床面積3,960.2m<sup>2</sup>の庁舎が完成し、昭和51年7月20日に落成式が挙行された。



林業試験場正面



林業試験場組織図



本館落成式

こうして試験場本館の建設や林業技術研修施設の一連の整備は、昭和48年度から昭和50年度にわたり、総額604,970千円で行われたが、この施設整備に伴い昭和51年4月、従来の林業試験場を徳島県林業総合技術センターと改称し、研修部門を担当する次長、及び専門技術員が配置されるとともに研修係が新設され、2係4科専門技術員制となった。このときの総職員数は





当時のパンフレット

24名（内研究職11名）であった。

また、昭和52年度から2か年計画で、鷲敷町の和食試験林を対象として「青少年の森」の施設整備事業が進められ、森林学習館（410m<sup>2</sup>）をはじめ、野外学習展示園（1.50ha）、実習用苗畑（100m<sup>2</sup>）、野鳥観察小屋、昆虫飼育小屋等の施設を利用して、昭和54年度から小・中・高校生や林業関係者等を対象に、森林、林業に対する学習の場として積極的な活用を図るなど多目的な運営を行うこととなった。

昭和55年4月、国補助成試験の大型プロジェクト研究等の実施に伴い、研究体制の充実を図るため木材科を新設し、庶務係、造林科、育種科、保護科、木材科、樹芸科、研修係、専門技術員の2係5科専門技術員制となり、総職員数は22名（内研究職11名）となった。

昭和62年4月、徳島すぎ等の材料強度の見直しと需要拡大を図るため、木材実大強度測定装置を主な設備とする実大強度試験棟（360m<sup>2</sup>）が開設された。

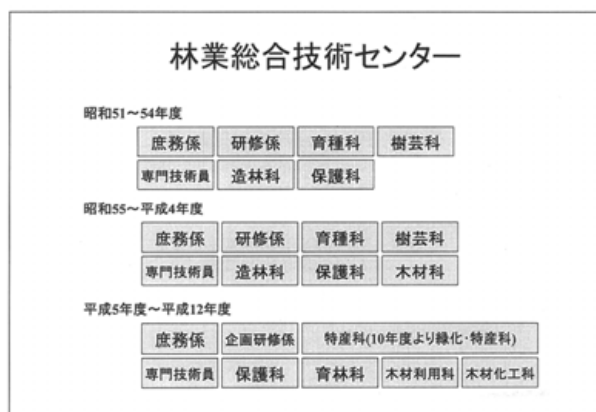
その後、明石海峡大橋の開通を睨んだ「3000日の徳島戦略」により県産木造住宅供給システム整備基本構想が策定されると、木材の需要拡大に関する試験研究の強化を図るため、平成5年4月、従来の木材科を、主に木材の物理的利用に関する試験研究を行う木材利用科と、主に木材の化学的利用に関する試験研究を行う木材化工科に分けることを始めとする組織の改編が行われ、庶務係、育林科、保護科、木材利用科、木材化工科、特産科、企画研修係、専門技術員の2係5科専門技術員制となり、総職員数も23名（内研究職12名）と増加した。

また、平成5年10月には、県産木造住宅供給システムの整備を技術的に支援し、木造住宅に関する各種技術開発や性能評価試験を目的とした新技術開発試験棟が新設され、既設の実大強度試験棟を含め、木材関連企業自らが試験研究のため利用できる開放型の研究施設とした国産材需要開発センター（オープンラボラトリー）が開設された。

平成10年4月、特産科を緑化・特産科とし、環境緑化思想の高まりと多様な特用林産物の試験研究に対応した。

一方、試験研究の推移をみると、昭和30年代は前述のとおりであるが、昭和40年代になると、苗畑関係では土壌線虫やヒノキの立枯病、森林関係ではスギカミキリ、スギノハダニ、松くい虫などの病害虫被害が増加し、技術的な対応が迫られてきたため、昭和42年度には、これら病害虫の防除試験が林木育種やシイタケに関する研究とともに重点課題に取り上げられた。また、昭和30年代後半からの林業労働力の不足と賃金の高騰を反映して、省力技術開発の要請が高まり、これに対応して林業用除草剤の研究が昭和37年に開始され、さらに昭和40年代の前半には、ポット造林やスギの直挿し造林に関する研究が行われた。

昭和40年代の後半になると、森林・林業を取り巻く諸情勢が大きく変化し、外材主導の木材需給構造となり、国産材の振興対策が重要課題となった。これに対応して、間伐材等小径木の有効利用を検討するため、昭和46年には集成材加工試験が、昭和47年にはスギ間伐材の材質試験が開始された。



林業総合技術センター組織図

また、環境問題や都市問題等に対する世論が高まったのもこの頃からで、大気汚染の樹木に与える影響の調査や、緑化木の山取り試験などが行われている。

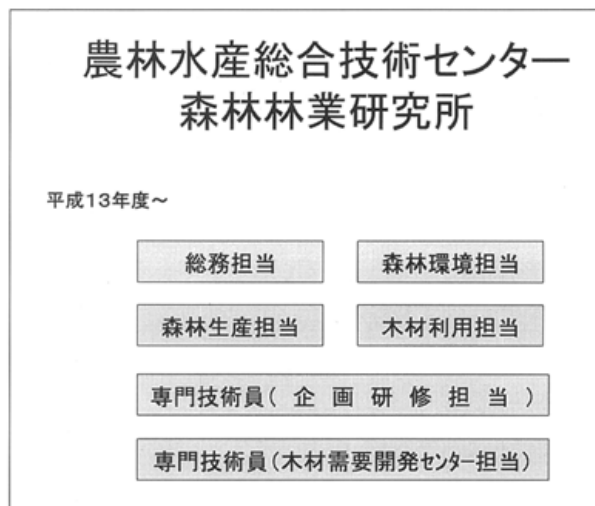
昭和50年代になると、林地の保全や公益的機能の発揮が期待できる施業方法として非皆伐施業が注目されるようになり、これに対応して、昭和53年度から複層林施業に関する研究が開始された。

また、この時期、行政上、産業上緊急に解決を迫られていた「松の枯損防止新技術」、「食用きのこ類の高度生産技術」の2課題については昭和53年度から、「国産材の多用途利用開発」については昭和54年度から、それぞれ国庫助成試験の大型プロジェクト研究で取り上げ、研究の促進を図った。

その後の、昭和60年代から平成の間の主な試験研究についてみると、木材関係では、徳島スギの構造材への利用拡大を図るための実大強度試験、構造材の乾燥技術と内外装材料の高耐久化と高付加価値化技術の開発、森林保護関係ではスギカミキリの防除技術の開発試験、シカ等の大型野生獣類の効果的な防除方法の調査研究、特産関係では、シイタケ菌床栽培技術の試験等の、技術開発に対する要請が強い課題で、実用化に直接結びつく研究を重点的に実施している。

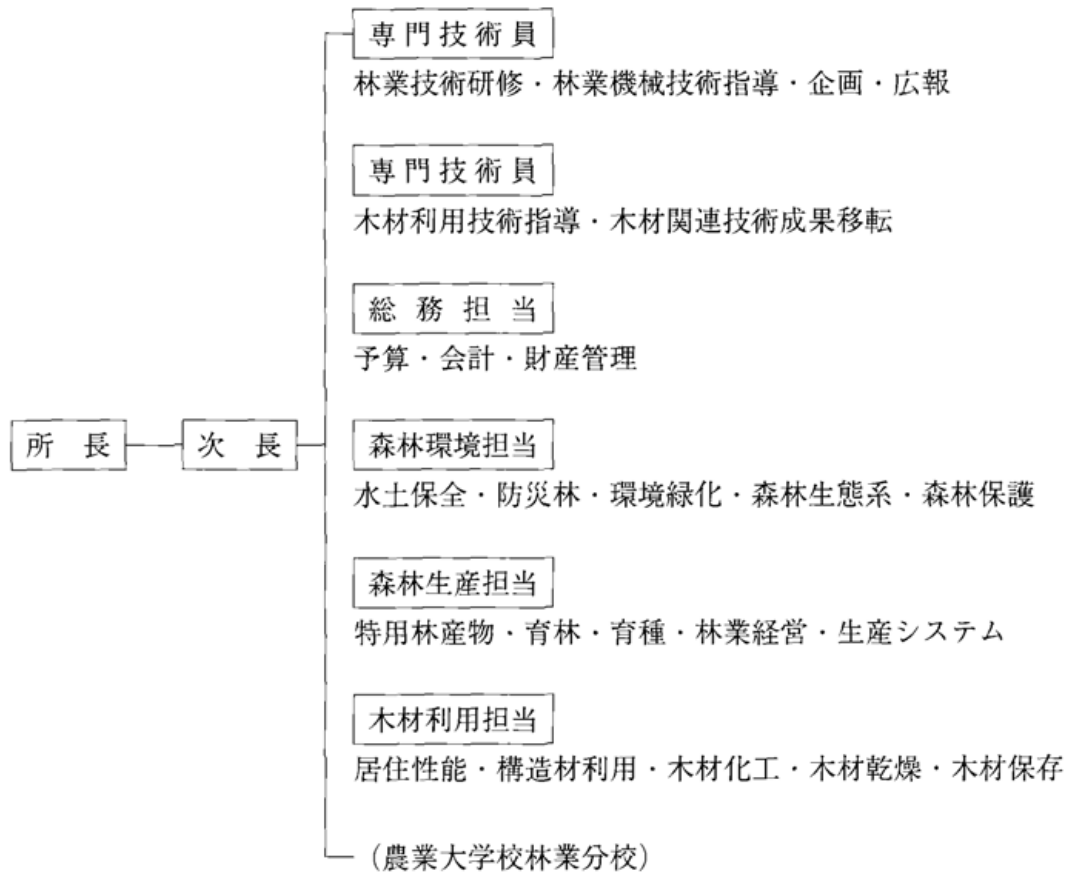
#### 4. 森林林業研究所と現在の体制

平成13年4月1日の機構改革により、農林水産関係の総合的な研究開発を推進するため、各試験研究機関を統轄する機関として農林水産総合技術センターが設置され、これにより名称が、農林水産総合技術センターの内部組織としての森林林業研究所と改称された。従来の係・科制から担当制となり、総務担当、森林環境担当、森林生産担当、木材利用担当、専門技術員の4担当専門技術員制となった。



森林林業研究所組織図

1) 組織



2) 人員配置

職 種 担 当	一 般 職 員			計
	研 究 職	行 政 職	技 能 職	
所 長	1			1
次 長	1			1
專 門 技 術 員		3		3
総 務 担 当		3		3
森 林 環 境 担 当	3	1	1	5
森 林 生 産 担 当	3		1	4
木 材 利 用 担 当	3		1	4
計	11	7	3	21



## 5. 施設等の現況

### 1) 土 地

種 別	所 在 地	面 積	使用状況	備 考
敷 地	徳島市南庄町5丁目	1.81ha	敷地・樹木園	国有地借受
	徳島市南庄町5丁目1の9	0.93	苗畑	
	徳島市加茂名町庄山87の3	0.31	苗畑	
	徳島市南庄町5丁目	0.90	敷地	
	小 計	3.95		
試験林	徳島市加茂名町庄山87の4	1.44	試験林	県 有 林
	那賀郡鷲敷町大字和食郷字南川590の1	61.86	試験林	
	小 計	63.30		
合 計		67.25		

### 2) 建 物

#### ア 建物一覧表

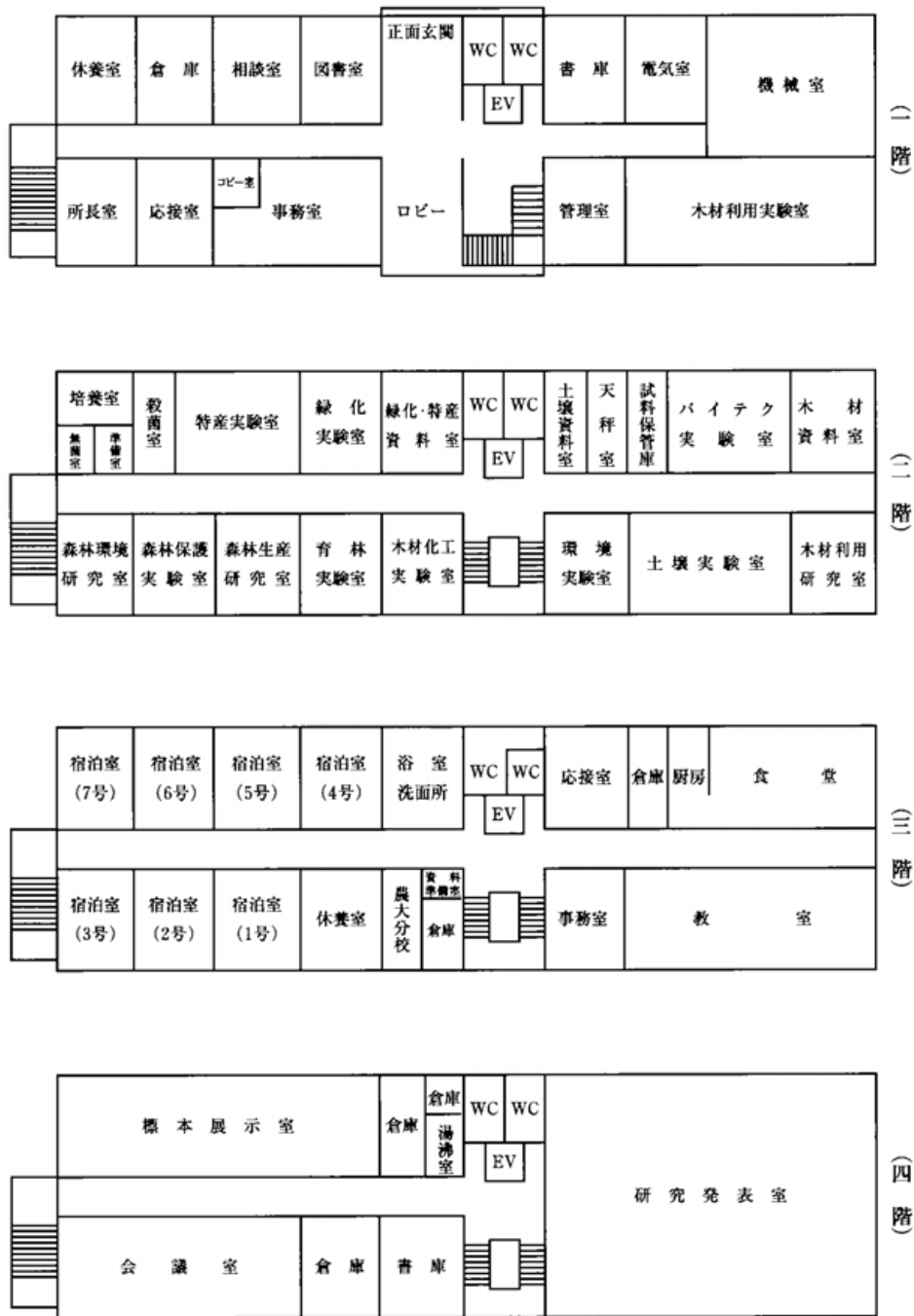
名 称	構 造	延 面 積
本館	鉄筋コンクリート4階建	3,960.20m <sup>2</sup>
実習舎・車庫	鉄骨スレート平屋建	675.35
作業舎	鉄筋コンクリートスレート平屋建	331.80
種子貯蔵庫	コンクリートブロック平屋建	37.80
球果乾燥精選室	鉄骨スレート平屋建	103.68
シイタケ発生フレーム	鉄骨造平屋建（ガラス張）	33.00
シイタケ乾燥室	鉄筋コンクリート平屋建	24.80
保護実験準備室	木造平屋建	99.10
温室	アルミニウム平屋建	44.70
きのこ開発加工施設	鉄筋コンクリート平屋建	33.05
農大林業分校学生寮	木造平屋建	56.85
実大強度試験棟	木造平屋建	360.00
新技術開発試験棟	木造一部RC造平屋建	544.40
住宅資材性能試験棟	木造一部RC造平屋建	336.00
和食試験林事務所	木造平屋建	54.11

イ 施設配置図



1	本 館	7	作業舎	13	お手まき育苗地
2	シイタケ乾燥室等	8	温 室	14	人工ほだ場
3	保護実験準備室	9	実大強度試験棟	15	気象観測施設
4	実習舎・車庫	10	新技術開発試験棟	16	網 室
5	農大林業分校学生寮	11	住宅資材性能試験棟		
6	種子貯蔵庫等	12	車両系運転技能練習場		

ウ 本館見取図



3) 樹木園

当研究所の樹木園は、昭和29年の林業指導所発足と同時に造成され、当初、69科、329種に及ぶ樹種が植栽された。

現在は園内面積1.30ha内に、63科、221種（国内産樹種126種、外国産樹種71種、園芸品種24種）の樹木が成立している。

この樹木園は、樹種の特長や病虫害調査等の試験研究に利用するとともに、森林浴を楽しんだり樹木についての知識を持ってもらうことをねらいに、県民に開放している。



近所の幼稚園の園内散策



樹木園樹種一覧表

科名	樹種名	区分
ソテツ	ソテツ	○
イチヨウ	イチヨウ	○
イチイ	イチイ (アララギ)	●
〃	キャラボク	◇
マキ	ナギ	●
〃	イヌマキ	●
〃	ラカンマキ	○
イヌガヤ	イヌガヤ	●
〃	チョウセンマキ	◇
ナンヨウスギ	ブラジルアロウカリア	○
マツ	アカマツ	●
〃	タギョウショウ	◇
〃	クロマツ	●
〃	ゴヨウマツ	●
〃	ダイオウショウ	○
〃	テーダマツ	○
〃	スラッシュマツ	○
〃	モミ	●
〃	ドイツトウヒ	○
〃	ヒマラヤシーダー	○
スギ	スギ	●
〃	セッカンスギ	◇
〃	コウヨウザン	●
〃	ラクウショウ	○
〃	スイショウ	○
〃	センベルセコイヤ	○
〃	メタセコイヤ	○
ヒノキ	ヒノキ	●
〃	タギョウヒノキ	◇
〃	ヒヨクヒバ	◇
〃	ヒムロ	◇
〃	コノテガシワ	○
〃	アスナロ	●
〃	ハイビャクシン	◇
〃	ネズミサシ	●
ヤナギ	アカメヤナギ	●
〃	アメリカヤマナラシ	○
〃	イタリアボブラ	○

科名	樹種名	区分
ヤマモモ	ヤマモモ	●
クルミ	テウチグルミ	○
〃	ノグルミ	●
〃	サワグルミ	●
〃	シナサワグルミ	○
カバノキ	カワラハンノキ	●
〃	イヌシデ	●
ブナ	ブナ	●
〃	クリ	●
〃	マテバシイ	●
〃	シラカシ	●
〃	アカガシ	●
〃	ウバメガシ	●
〃	アラカシ	●
〃	カシワ	●
〃	コナラ	●
〃	クヌギ	●
ニレ	エノキ	●
〃	ケヤキ	●
クワ	ハリグワ	○
モクマオウ	モクマオウ	○
カツラ	カツラ	●
メギ	ヒイラギナンテン	○
〃	ササバナナンテン	◇
モクレン	タイサンボク	○
〃	モクレン	○
〃	コブシ	●
〃	オガタマノキ	●
〃	ユリノキ	○
〃	シキミ	●
ロウバイ	ソシンロウバイ	◇
クスノキ	ゲッケイジュ	○
〃	クスノキ	●
〃	ニッケイ	○
〃	ヤブニッケイ	●
〃	タブノキ	●
〃	シロダモ	●
〃	イヌガシ	●

科名	樹種名	区分
クスノキ	テンダイウヤク	○
ユキノシタ	アジサイ	◇
〃	ノリウツギ	●
〃	ウツギ	●
〃	ウメウツギ	●
トベラ	トベラ	●
マンサク	タイワンフウ	○
〃	アメリカフウ	○
〃	イスノキ	●
トチュウ	トチュウ	○
スズカケノキ	スズカケノキ	○
バラ	ヤマザクラ	●
〃	ベニヤマザクラ	●
〃	ソメイヨシノ	●
〃	マメザクラ	●
〃	エゾノウワミズザクラ	●
〃	一葉	◇
〃	オオウチヤマザクラ	◇
〃	開成山桜	◇
〃	サノザクラ	◇
〃	ソトオリヒメ	◇
〃	松前早咲桜	◇
〃	オヒョウモモ	○
〃	ハナモモ	◇
〃	セイヨウミザクラ(サクラランボ)	○
〃	ベニスモモ	◇
〃	リンボク	●
〃	バクチノキ	●
〃	セイヨウバクチノキ	○
〃	カリン	○
〃	ヤマブキ	●
〃	コデマリ	○
〃	ユキヤナギ	●
〃	カナメモチ	●
〃	オオカナメモチ	●
マメ	フジ	●
〃	イギリストゲナシニセアカシア	○
〃	シダレエンジュ	○

科名	樹種名	区分
マメ	イヌエンジュ	●
〃	ハネミイヌエンジュ	●
ミカン	キハダ	●
ニガキ	シンジュ	○
〃	ニガキ	●
セندان	セندان	●
トウダイグサ	ユズリハ	●
〃	ヒメユズリハ	●
〃	シナアブラギリ	○
〃	ナンキンハゼ	○
ツゲ	セイヨウツゲ	○
〃	ボックスウッド	○
ウルシ	ハゼノキ	●
〃	カイ(カキノキ)	○
モチノキ	モチノキ	●
〃	イヌツゲ	●
〃	コバノイヌツゲ	●
〃	マメツゲ	◇
〃	タラヨウ	●
〃	ソヨゴ	●
〃	クロガネモチ	●
ニシキギ	マサキ	●
〃	ニシキギ	●
〃	マユミ	●
〃	コマユミ	●
カエデ	イロハカエデ	●
〃	ヤマモミジ	●
〃	ハナノキ	●
〃	トウカエデ	○
〃	テツカエデ	●
トチノキ	トチノキ	●
ホルトノキ	ホルトノキ	●
シナノキ	シナノキ	●
〃	アメリカシナノキ	○
アオイ	ムクゲ	●
アオギリ	アオギリ	●
〃	アラバオーストラリアアオギリ	○
ツバキ	ヤブツバキ	●

科名	樹種名	区分
ツバキ	セイヨウツバキ	◇
ク	クロツバキ	◇
ク	サザンカ	●
ク	カンツバキ	●
ク	チャノキ	○
ク	モッコク	●
ク	ヒサカキ	●
ク	ハマヒサカキ	●
ク	サカキ	●
ジンチョウゲ	ミツマタ	○
グミ	ナツグミ	●
ク	ナワシログミ	●
ク	サルスベリ	○
ザクロ	ヒメザクロ	◇
フトモモ	マキバブラッシノキ	○
ク	ユーカリ・グロブラス	○
ク	ユーカリ・シネリア	○
ク	ユーカリ・ピミナリス	○
ウコギ	ヤツデ	●
ク	カクレミノ	●
ク	ハリギリ	●
ミズキ	アオキ	●
ク	ハナミズキ	○
ク	サンシュユ	○
ツツジ	リュウキュウツツジ	●
ク	キリシマツツジ	●
ク	サツキ	●
ク	キレンゲツツジ	●
ク	キシツツジ	●
ク	オオムラサキツツジ	●
ク	ヒラドツツジ	◇
ク	アセビ	●
ク	シャシャンボ	●
ヤブコウジ	タイミンタチバナ	●
カキノキ	カキノキ	●
ク	トキワガキ	●
ハイノキ	ミミズバイ	●
ク	タンナサワフタギ	●

科名	樹種名	区分
エゴノキ	ハクウンボク	●
モクセイ	キンモクセイ	○
ク	ヒイラギ	●
ク	ヒイラギモクセイ	○
ク	チョウセンレンギョウ	○
ク	オウバイ	○
ク	ハシドイ	●
ク	ネズミモチ	●
ク	トウネズミモチ	○
ク	イボタノキ	●
ク	ヒトツバタゴ	●
ク	トネリコ	●
キョウチクトウ	キョウチクトウ	○
ムラサキ	チシャノキ	●
クマツヅラ	ムラサキシキブ	●
ク	ニンジンボク	○
アカネ	クチナシ	●
ク	ハクチョウゲ	○
スイカズラ	サンゴジュ	●
ク	ガマズミ	●
ク	コバノガマズミ	●
ク	ハナヅノツクバネウツギ	●
ク	タニウツギ	●
ク	ウグイスカグラ	●
ヤシ	シュロ	○
ク	カナリーヤシ	○
ク	チャボトウジュロ	○
ク	セイヨウシュロ	○
ク	チリーヤシ	○
ク	ブラジルヤシ	○
ユリ	ニオイシュロラン	○

注) ●国内産樹種、○外国産樹種、  
◇園芸品種

#### 引用文献

佐藤尚史：林業総合技術センター樹木園の樹木リスト、徳島県林業総合技術センター 業務年報、(1997)

## 6. 和食試験林

### 1) 所在地

徳島県那賀郡鷺敷町大字和食郷字南川590の1,2,48,53～58

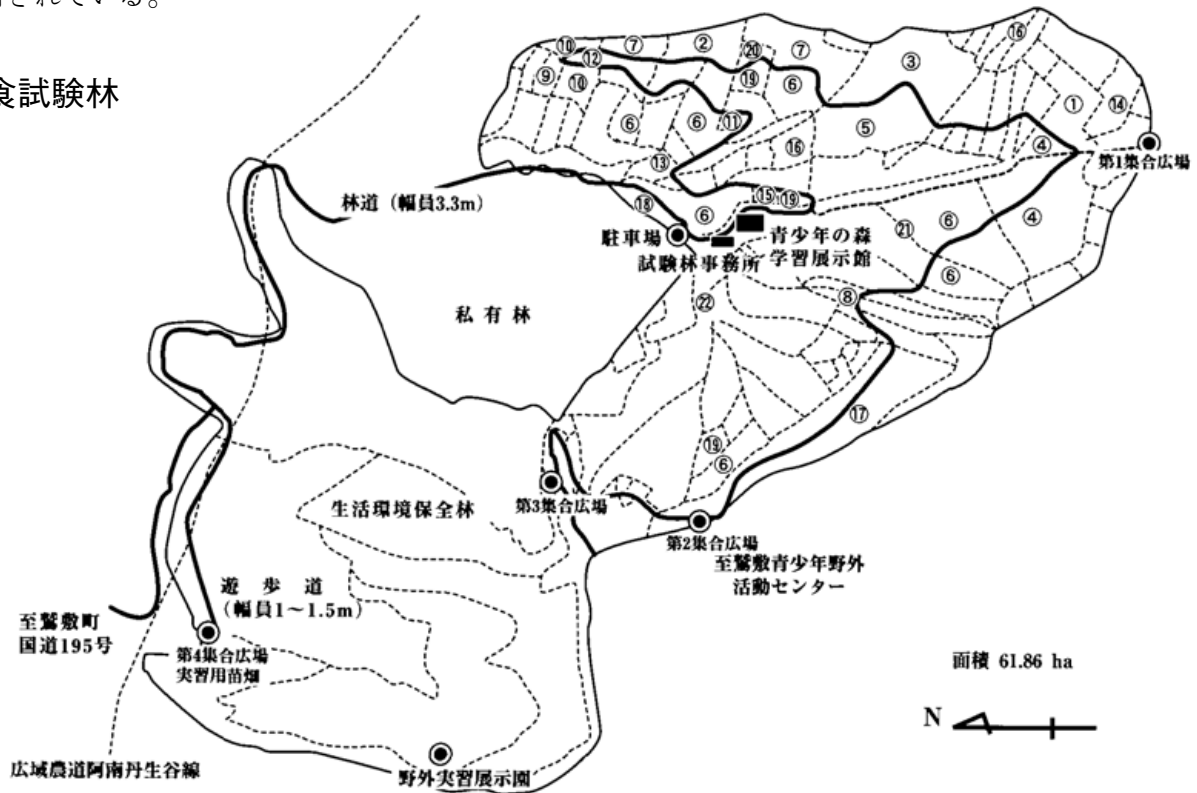
### 2) 面積

61.86ha

### 3) 概況

和食試験林は、明治38年以来県有林として保育管理されていたが、昭和40年に総合試験林として当所へ移管された。その後、各種の実用化試験林、見本林及び検定林を設置し、試験研究の場として使用するとともに、同時に施設整備も図り、昭和54年には「青少年の森」がオープン、また、平成3年には生活環境保全林が整備され、現在では森林・林業の学習の場及び保健休養の場など、多目的に広く県民に利用されている。

### 和食試験林



1. 抵抗性アカマツ採種園
2. 抵抗性クロマツ採種園
3. ヒノキ採種園
4. スギ採穂園
5. クロマツ採種園
6. スギ検定林
7. ヒノキ検定林
8. サクラ見本林 (並木)
9. 挿し木スギ展示林
10. スラッシュマツ見本林
11. タケ類見本林

12. ツツジ見本林
13. ケヤキ見本林
14. クヌギ見本林
15. 庭園木見本林
16. 和華松見本林
17. 有用広葉樹等見本林
18. ヤマモモ見本林
19. スギ天然絞品種見本林
20. 木頭スギ見本林
21. 巻き枯らし間伐試験林
22. スギ複層林試験林





試験林事務所（手前）と森林学習館



高校生の森林林業教育

#### 4) 試験林内訳

(単位：ha)

採種穂園	検定林	展示林・見本林	試験林	生活環境保全林他	計
4.60	5.15	6.39	0.40	45.32	61.86

##### ア 採種穂園

名称	面積(ha)	設定年度	概要	要
抵抗性アカマツ採種園	0.30	H4	30クローン（県内産3）、240本を配植	
抵抗性クロマツ採種園	0.40	H3	16クローン（県外産）、320本を配植	
ヒノキ採種園	1.00	S61	25クローン（県内産18）、1,350本を配植	
スギ採種園	1.90	S44 H2,3	県内11クローンの精英樹を配植	
クロマツ採種園	1.00	S41	25クローン（県内産13）、1,239本を配植	
計	4.60			

イ 検定林

名 称 (種 別)		面積(ha)	設定年度	概 要
ス ギ 検 定 林	県 内 選 抜	1.00	S41 ~42	県内の精英樹89クローンを植栽
	第 2 次 選 抜	0.15	S42	上記89クローンから発根率の良好な10クローンを選抜し植栽
	地 域 差 (四 国 地 区)	1.00	S43	四国地方の精英樹40クローン (徳島7, 高知18, 香川3, 愛媛12) を植栽
	オ ー プ ン 苗	0.50	S43 ~45	岩倉採穂園で自然交配した県内産精英樹オープン苗40系統、県外産29系統を植栽
	地 域 差 (関 西 地 区)	1.50	S48 ~49	関西地区17県の精英樹17クローン (うち県内産1) を植栽
ヒ ノ キ 検 定 林		1.00	S45	県内産ヒノキ精英樹オープン苗18系統と地ヒノキを植栽
計		5.15		

ウ 展示林・見本林

名 称	面積(ha)	概 要
サクラ見本林 (並木)	0.30	日本産のサクラ107品種520本を昭和46年度から植栽
挿し木スギ展示林	3.00	神山スギ、オビスギの挿し木を植栽
スラッシュマツ見本林	0.30	昭和41年度にかけて植栽
タケ類見本林	0.02	庭園用の竹類22種類を昭和46年度に植栽
ツツジ見本林	0.10	県内に自生するツツジ15種類を昭和46年度に植栽
ケヤキ見本林	0.07	昭和45年度に植栽
クヌギ見本林	0.25	昭和43年度に植栽
庭園木見本林	0.10	試験林内に自生する19種類の広葉樹を庭園木として樹形誘導
和華松見本林	0.20	台湾アカマツと日本のアカマツ、クロマツを交配させた和華松を植栽
有用広葉樹見本林	1.60	緑化事業等に用いられる有用広葉樹等62種類を昭和49, 50, 53年度に植栽
ヤマモモ見本林	0.05	県内産のヤマモモ13品種を昭和42年度から植栽するとともに原種を保存

名 称	面積(ha)	概 要
スギ天然絞品種見本林	0.20	県外の天然絞6品種を平成2年度に植栽
木頭スギ見本林	0.20	平成元年、全国植樹祭において、天皇・皇后両陛下のお手蒔き苗に用いられたスギを植栽
計	6.39	

エ 試験林

名 称	面積(ha)	概 要
巻き枯らし間伐試験林	0.20	巻き枯らしによる間伐効果を調査
スギ複層林試験林	0.20	スギ複層林における省力技術の試験を実施
計	0.40	

5) 樹種別・齢級別面積

(単位: ha)

樹種 \ 齢級	齢級															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	18	計
スギ			0.40	0.03	0.02	1.17	8.51	1.56	0.72	14.84	3.60	3.87				34.72
ヒノキ						0.10	2.16	0.15	1.28	2.40	1.63	0.68	0.15	0.10	1.49	10.14
アカマツ			0.30							0.75						1.05
クロマツ			0.50					2.00								2.50
スラッシュマツ									0.91							0.91
その他	0.60	0.10	0.22	0.10	0.77	1.99	1.09	0.18		1.64	0.83	0.02		0.38		7.92
計	0.60	0.10	1.42	0.13	0.79	3.26	11.76	3.89	2.91	19.63	6.06	4.57	0.15	0.48	1.49	57.24